

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著、 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は 発表学会等の名称	概 要
(著書(欧文)) 1. なし				
(著書(和文)) 1. 『障害科学の展開第5巻 障害理解のための心理学：障害児・者の心理アセスメントや支援のための基礎を学ぶ』	共著	2008年5月	明石書店(総ページ数408ページ)	1) 『心理・発達臨床の倫理』(第4章第4節2. P. 373-380.) ; 2) 『ワーキングメモリと読み』(TOPICS1. P. 384-385.); 3) 『発達障害者の支援 - 大人になっている人の支援を考える - 』(TOPICS2. P. 386-387.). (前川久男・長崎勤編著)
2. 保育士試験合格指導講座テキスト6『保育の心理学』	単著	2012年10月	(株) ユーキャン	保育士試験合格を目的に開講されている通信教育講座における専門科目である『保育の心理学』のテキスト。乳幼児の心理発達に関する基本事項を網羅した内容である。
3. 『発達障害の理解と支援のためのアセスメント』	共著	2013年3月	日本文化科学社	発達に障害を持つ方々が自己を発揮するためどのような支援を必要としているのか、それを知るためのアセスメントについて、様々な角度から掘り下げた書物である。(前川久男・梅永雄二・中山健 編)
4. 『特別支援教育・障害児保育入門』	共著	2020年4月	建帛社	「第13章 多様な支援を必要とする乳幼児、児童及び生徒の把握や支援」を担当し、従来の教科書では取り上げられることの少なかった外国にルーツを持つ子どもや、LGBT等(性自認に関する問題)に関する子どもの教育的ニーズの理解や教育的支援について解説した。(執筆ページ数12ページ) (咲間まり子編著)
(学術論文(欧文)) 1. 『Inhibition of mitochondrial protein synthesis impaired C2C12 myoblast differentiation』	共著	1997年3月	Cell Structure and Function, Vol. 22, No. 4, P. 421-P. 431.	ミトコンドリア蛋白合成を阻害することによる筋細胞分化への影響について、遺伝子発現のレベルで分化が阻害されていることを明らかにした。(Naoko Hamai, Masahiko Nakamura, Akira Asano) (共同研究のため担当部分抽出不可能) (査読あり)

2. 『Reading remediation for Japanese children with reading difficulties: PASS reading enhancement program (PREP)』	共著	2008年3月	Japanese Journal of Special Education, Vol. 45, No. 6, P. 405-P. 420.	認知のPASS理論に基づく読み促進教材であるPASS Reading Enhancement Program (PREP)の日本版を作成し、日本の読み困難児にも有効で、継次処理の改善を通して読み能力の改善が図られることを明らかにした。*第20回日本特殊教育学会研究奨励賞受賞論文 (Naoko Hamai-Muroya, Hisao Maekawa) (共同研究のため担当部分抽出不可能) (査読あり)
3. 『Cognitive predictors of literacy acquisition in syllabic Hiragana and morphographic Kanji』	共著	2017年6月	Reading and Writing, Vol. 30, No. 6, P. 1335-P. 1360. DOI: 10.1007/s11145-017-9726-4	読み障害の認知心理学的な原因理論に関する基礎研究として、定型発達児を対象にひらがなと漢字の読み書き発達における規定因を検討した。その結果、ひらがなの規定因は文字と音の対応関係の一貫性が高い言語に近く、漢字の規定因は中国語に近いことが示唆された。(Inoue, T., Georgiou, G. K., Muroya, N., Maekawa, H., & Parrila, R.) (共同研究のため担当部分抽出不可能) (査読あり)
4. 『Can earlier literacy skills have a negative impact on future home literacy activities? Evidence from Japanese』	共著	2017年	Journal of Research in Reading, Vol. 41, Issue1, P. 159-P. 175. DOI:10.1111/1467-9817.12109	読み障害の関連要因に関する基礎研究として、定型発達児を対象に家庭での読書関連活動と子どもの読み書き発達の関係を検討した。その結果から、子どもの読み書きの状態に応じて家庭での読書関連活動の頻度が調整されることが示唆された。(Inoue, T., Georgiou, G. K., Muroya, N., Maekawa, H., & Parrila, R.) (共同研究のため担当部分抽出不可能) (査読あり)
5. 『The role of morphological awareness in word reading skills in Japanese: A within-language cross-orthographic perspective』	共著	2017年	Scientific Studies of Reading, Vol. 21, No. 6, P. 449-P. 462.	読み書き発達の背景要因として指摘される形態素意識と、単語読み技能との関連性を検討した。その結果、小1時点の形態素意識は小2のひらがな・漢字の読みと関連し、漢字でより影響が大きかった。(Muroya, N., Inoue, T., Hosokawa, M., Georgiou, G. K., Maekawa, H., & Parrila, R.) (共同研究のため担当部分抽出不可能) (査読あり)
6. 『Predicting the early growth of word and nonword reading fluency in a consistent syllabic orthography』	共著	2020年7月	Journal of Research in Reading, Vol. 43, No. 3, P. 364-P. 381. DOI:10.1111/1467-9817.12317	ひらがな単語および非単語の読み流暢性の初期発達に関わる認知的要因を検討し、単語・非単語双方に共通する背景要因があり、互いに影響を及ぼしあいながら読みの流暢性は発達することが示唆された。(Inoue, T., Georgiou, G. K., Muroya, N., Hosokawa, M., Maekawa, H., & Parrila, R.) (共同研究のため担当部分抽出不可能) (査読あり)

7. 『Reading in different scripts predicts different cognitive skills: evidence from Japanese』	共著	2021年11月	Reading and Writing, Vol. 35, P. 1425-P. 1448. DOI:10.1007/s11145-021-10228-4	191名の小学2年生の、3年生にかけての読み発達に関わる認知的要因を縦断的に検討した結果、小2のひらがな読み流暢性が小3のRANおよび視空間認知を予測し、小2の漢字の正確な読みが小3時の語彙能力を予測した。これらより、子どもが学ぶ文字種は、発達しつつある読み技能が認知的基盤にどう影響するかに影響を与え得ることが示唆された。(Inoue, T., Georgiou, G. K., Hosokawa, M., <u>Murova, N.</u> , Kitamura, H., Tanji, T., Imanaka, H., Oshiro, T., & Parrila, R.) (共同研究のため担当部分抽出不可能) (査読あり)
(学術論文(和文)) 1. 『ひらがな読みに困難を示す生徒における音韻処理および聴覚情報処理に関する検討』	共著	2004年7月	LD研究, Vol. 13, No. 2, P. 151-P. 162.	ひらがなの読みに困難を示す子どもの、ひらがな単語の読みと、音韻処理能力や聴覚情報処理能力との関連性を検討した。(細川美由紀、 <u>室谷直子</u> 、二上哲志、前川久男) (共同研究のため担当部分抽出不可能) (査読あり)
2. 『読み障害児の言語性ワーキングメモリと読み能力との関連性の検討』	共著	2005年3月	心身障害学研究, Vol. 29, P. 51-P. 59.	読み障害児では、読み事態では統語的な読みプロセスが促進され、聞き事態では推論といった意味内容の統合・調整のかかわる読みプロセスが促進される可能性が示唆された。(室谷直子、前川久男) (共同研究のため担当部分抽出不可能) (査読あり)
3. 『読み障害児の背景要因としての言語性ワーキングメモリに関する研究-情報入力様式の影響から-』	単著	2005年3月	学位論文(博士) 筑波大学 116頁 (40字×30行)	読み書き障害の背景要因としてのワーキングメモリ(作動記憶)について、情報入力様式(モダリティ)に着目した実験的および事例的検討を行った。特に論文後半部分で取り組んだ読み障害児の個別の認知プロフィールに基づく事例的検討では、ワーキングメモリ課題遂行上の特性と個別の読み能力や認知テストの結果との関連性を検討した。その結果、読み障害児において情報入力様式(入力モダリティ等)の影響がみられるのは、彼らの音韻表象を形成・操作する能力の不全と深く関わることを示唆された。

<p>4. 『読み障害児の言語性ワーキングメモリ課題遂行上の特徴と音読の効果について』</p>	<p>共著</p>	<p>2006年3月</p>	<p>LD研究, Vol. 15, No. 1, P. 100-P. 109.</p>	<p>読み障害児のワーキングメモリ課題において、読み事態、聞き事態に加え、音読を行った場合と黙読の場合とを条件に加え、音読の条件が読み障害児のワーキングメモリ課題遂行に与える影響を検討した。その結果、健常児に比べ読み障害児では音読条件で好成績を示す者の割合が多く、能動的に発音すること（音読）によって、不確実な音韻表象を確実なものにする効果があることが推察された。*障害科学学会研究奨励賞受賞論文 (室谷直子、前川久男、細川美由紀、二上哲志) (共同研究のため担当部分抽出不可能) (査読あり)</p>
<p>5. 『読み障害児へのリハーサル方略を用いた読解指導の効果について』</p>	<p>共著</p>	<p>2007年3月</p>	<p>障害科学研究, Vol. 31, P. 179-P. 190.</p>	<p>二名の読み障害児に学年相応の教材を用いリハーサル方略を用いた読解指導を実施した結果、二名とも単語レベルの読みの改善がみられたが、文章理解レベルでの改善がみられたのは一名であり、方略を導入する際、その目的や効果を本人に意識化させることの重要性が考察された。 (室谷直子、奥畑志帆、岡崎慎治) (共同研究のため担当部分抽出不可能) (査読あり)</p>
<p>6. 『就学後に学習のつまずきが予想される幼児に対するCOGENTプログラムを用いた指導の効果』</p>	<p>共著</p>	<p>2013年3月</p>	<p>障害科学研究第37巻</p>	<p>就学後の学習のつまずきが予想される幼児に、読みの背景認知を調整するCOGENTプログラムを用いた指導を行った事例の検討。(青木真純、室谷直子、増南太志、松沢晴美、高野知里、岡崎慎治、前川久男) (査読あり)</p>
<p>(紀要論文) 1. 保育士養成課程における実習指導の在り方-施設実習事前指導における実践と課題-</p>	<p>単著</p>	<p>2015年3月</p>	<p>常磐短期大学研究紀要第43号 (2014年度)</p>	<p>保育実習のうち、「施設実習」の事前指導の在り方を、筆者自身の授業内容の分析、厚労省告示、施設からの要望などに基づき検討し、今後の施設実習指導への指針を模索した。</p>
<p>2. Effects of presentation mode of working memory tasks on relatively poor readers</p>	<p>単著</p>	<p>2017年3月</p>	<p>常磐短期大学研究紀要第45号 (2017年度)</p>	<p>読み能力とワーキングメモリー(WM)との関連性におけるモダリティの影響を明らかにするため、中学生40名に対し読み課題と、視覚提示と聴覚提示の文スパン(WM)課題を実施した。その結果、読みの高成績者ではモダリティの影響がみられなかった一方、低成績者では、特に聴覚提示の時、読み能力とWMの関連性を適切に反映しない可能性が示唆された。</p>

3. 保育士養成課程の学生における保育体験活動による学び – 実習・就職への意欲や不安との関連性 –	共著	2019年3月	常磐短期大学研究紀要第47号 (2018年度)	保育者養成校の学生を対象とし、実習指導の一環として学外保育体験活動による、実習や保育職に対する意識の変化について調査した。その結果、保育体験活動による事前学習や、保育職への動機づけの低い学生への事前指導の重要性が示唆された。(木村由希, 大内晶子, 室谷直子)
(辞書・翻訳書等) 1. なし				
(報告書・会報等) 1. なし				
(国際学会発表) 1. 『Effect of reading aloud on reading span test in reading disabled readers』	共著	2004年8月	2nd International Conference on Working Memory (ポスター)	読み障害児のワーキングメモリ課題遂行における音読の効果を検討し、相対的に“読む”より“聞く”条件で苦手さを示す者において、音読が課題遂行を促進することが示された。 (Naoko Muroya, Hisao Maekawa)
2. 『Auditory Pattern Discrimination and Phonological Processing in Children of School Age』	共著	2004年8月	28th International Congress of Psychology (ポスター)	定型発達児の聴覚的パターン識別能力の発達について検討し、低学年の子どもにおいて、呼称、読みの自動化、音韻認識の正確さが、読み能力を予測し得ることが示された。 (Miyuki Hosokawa, Naoko Muroya, Shinji Sato, Hisao Maekawa)
3. 『The relation among working memory, short-term memory, phonological processing, and reading comprehension in children』	共著	2008年7月	29th International Congress of Psychology (ポスター)	読解、および読関連技能等を、90余名の定型発達児に実施。重回帰分析の結果、読解の予測因子として音韻削除とワーキングメモリの要因が抽出されたが、音韻削除課題が関連するとの結果は先行研究と必ずしも一致するものではなかった (Naoko Hamai-Muroya, Hisao Maekawa)
4. Phonemic awareness and romaji knowledge in Japanese children	共著	2014年7月	22nd Annual Meeting Society for the Scientific Study of Reading – Conference 2013 (ポスター)	小1の音韻意識とローマ字知識との関連性を検討した結果、1年生の時点では約2割の子どもで音素削除が可能であるが、内約8割はローマ字が全く読めず、ローマ字知識は音素レベルの音韻課題遂行に必須ではないことが示された (Tomohiro Inoue, Fumiko Higashihara, Naoko Muroya, Hisao Maekawa)

5. Relationship between morphological awareness and literacy in Japanese children	共著	2015年7月	23rd Annual Meeting Society for the Scientific Study of Reading - Conference 2014 (ポスター)	日本語を母国語とする小学1年生139名に読み書き及び関連する複数の認知課題を実施した。階層回帰分析の結果、形態素意識がひらがな読み書き習得を予測しうることが示された。(Naoko Muroya, Tomohiro Inoue, Miyuki Hosokawa, Hiroyuki Kitamura, Hisao Maekawa)
6. Cognitive predictors of word reading fluency and kana writing in a syllabic language	共著	2015年7月	23rd Annual Meeting Society for the Scientific Study of Reading - Conference 2014 (ポスター)	1年生に認知的要因、ひらがなの読み書き課題を実施し、構造方程式モデリングを行った結果、モーラを音韻単位とする日本語でも英語圏と読み書きの予測因子が類似することが示された。(Tomohiro Inoue, Naoko Muroya, Takako Ooshiro, Hirohumi Imanaka, George K. Georgiou, Rauno Parrila, Hisao Maekawa)
7. Morphological awareness and early literacy skills in Japanese 1st and 2nd grade children	共著	2016年7月	31st International Congress of Psychology, Yokohama. (ポスター)	小学1年生における形態素意識の能力が、2年生時のひらがな、漢字、短文の読みの速さと正確さとどのような関連があるかを検討した結果、特に漢字の読みの正確さの予測因となることが示された。(Naoko Muroya, Tomohiro Inoue, Miyuki Hosokawa, George K. Georgiou, Rauno Parrila, Hisao Maekawa)
8. Literacy acquisition across diverse writing system	共著	2016年7月	31st International Congress of Psychology, Yokohama. (シンポジウム)	言語特性(正書法)の違いの読み書き能力習得への影響について、日本語、英語、中国語、韓国語圏の研究者による話題提供と討論がなされた。(Tomohiro Inoue, George K. Georgiou, Naoko Muroya, Takako Ooshiro, Hirohumi Imanaka, Hiroyuki Kitamura, Miyuki Hosokawa, Hisao Maekawa, Rauno Parrila)
9. 『The Role of Morphological Awareness in Word Reading Skills in Japanese.』	共著	2017年7月	25th annual conference of the Society for the Scientific Studies of Reading, Halifax, Canada. (ポスター)	入学直後の形態素意識は、音韻処理の影響を除いてもひらがな・漢字の単語読みと関連し、特に漢字読みへの関与が大きく、1年生後半よりも2年生で大きいことが示された。(Muroya, N., Inoue, T., Hosokawa, M., Georgiou, G. K., Maekawa, H., & Parrila, R.)
10. 『Cross-Lagged Relations between Word Reading Fluency in Syllabic Hiragana and Morphographic Kanji.』	共著	2017年7月	25th annual conference of the Society for the Scientific Studies of Reading, Halifax, Canada. (ポスター)	読み獲得初期において、ひらがな・漢字の読みが互いの読みの発達に及ぼす影響を検討した結果、両文字を用いた単語読みの流暢性は、双方向的に影響を及ぼし合うことが明らかとなった。(Inoue, T., Georgiou, G. K., Muroya, N., Ooshiro, T., Imanaka, H., Maekawa, H., & Parrila, R.)

11. 『Early growth in word and nonword reading fluency in a transparent syllabary. 』	共著	2018年7月	26th annual conference of the Society for the Scientific Studies of Reading, Brighton, UK. (ポスター)	低学年の子どものひらがな単語および非単語の読み流暢性の成長パターンを比較した結果、単語の方が熟達が速いことが明らかとなり、またその認知的予測因子として、アルファベット圏の結果と異なり、音韻意識が重要な役割を担わないことが示された。(Inoue, T., Georgiou, G. K., <u>Muroya, N.</u> , Sato, K., Beppu, S., Maekawa, H., & Parrila, R.)
12. 『Role of morphological awareness in Kanji literacy in 4th and 6th grade Japanese children』	共著	2021年7月	32nd International Congress of Psychology 2020+ in Prague (Hybrid) (ポスター)	小学4年生と6年生児童を対象とし、漢字読み書き能力と形態素意識との関連性を検討した。その結果、形態素意識は特に漢字書字との関連性が強く、また学年が上がるほど強い関連性が示されることが示唆された。(Muroya, N., Hosokawa, M., Inoue, T., Maekawa, H.)
13. 『Contributions of background factors to Japanese children's English words reading skills 』	共著	2021年7月	32nd International Congress of Psychology 2020+ in Prague (Hybrid) (ポスター)	小学5年生と6年生児童を対象とし、ローマ字読み、英単語読み、音韻処理能力および英語学習への態度や動機づけの関連性を検討した。その結果、ローマ字読みの知識を活用できない英単語の読み成績には、動機づけと音韻処理能力が関わることを示された。(Hosokawa, M., Satoh, K., <u>Muroya, N.</u> , Inoi, S.)
(国内学会発表)				
1. 『読み障害児の読みと作動記憶に関する研究』	共著	2002年8月	日本心理学会第66回大会	読み障害をもつ小中学生において、作動記憶容量が大きく制限されていることが明らかとなった(室谷直子、前川久男)
2. 『ひらがな読みに困難を示す子どもにおける聴覚時間情報処理に関する検討』	共著	2002年9月	日本特殊教育学会第40回大会	ひらがな読みに困難を示す子どもにおいて、聴覚的なパターン識別課題を実施し、読みの困難さや年齢と聴覚時間情報処理との関連性を検討した。(細川美由紀、比留間みゆ希、室谷直子、前川久男)
3. 『読みの熟達と作動記憶課題の遂行』	共著	2003年9月	日本心理学会第67回大会	定型発達児の読みの発達と、ワーキングメモリ(作動記憶)容量の変化との関連性を検討し、読みの発達と一致する形でワーキングメモリ容量が大きくなることが示された。(室谷直子、前川久男)
4. 『読みに困難を示す児童における音韻処理に関する検討』	共著	2003年9月	日本特殊教育学会第41回大会	読み困難児に対し、音韻認識、呼称、といった音韻処理課題を実施し、ひらがな読みを獲得した後も読み速度や呼称といった読みにかかわる中核的な障害は存在し続けることが示唆された。(細川美由紀、室谷直子、河村暁、大沼洋市朗、比留間みゆ希、前川久男)

5. 『認知処理能力の改善に焦点をあてた読み促進プログラム (PASS Reading Enhancement Program: PREP) の実践(2)』	共著	2004年9月	日本LD学会第13回大会	カナダで開発された、認知のPASS (プランニング・注意・同時処理・継次処理) 理論に基づく読み促進教材の日本版を作成、日本の読み困難児に実施した実践研究。 (比留間みゆ希、 <u>室谷直子</u> 、細川美由紀、佐藤晋治、前川久男)
6. 『読み書き障害児の作動記憶課題遂行における音読の影響』	共著	2005年9月	日本心理学会第69回大会	読み書き障害児が記憶課題を遂行する際、音読により成績が上昇する者は、書き言葉から自身が音声化した、あるいは音声として聞いたことばの音韻表象を保持することに困難さを持つ可能性が示唆された。(室谷直子、前川久男)
7. 『読みに困難さを示す児童・生徒における読み促進プログラムの効果について- PREP (PASS Reading Enhancement Program) の実践から -』	共著	2005年10月	日本LD学会第14回大会	認知のPASS理論に基づく読み促進教材PREP日本語版を読み困難児への実施し、読み能力改善と背景的な認知能力の改善について検討した。 (室谷直子、田中順子、細川美由紀、比留間みゆ希、前川久男)
8. 『国語、英語の読み書きに困難を示す中学生への学習指導について』	共著	2006年5月	平成18年度第1回筑波大学東京キャンパス心身障害学相談部ケースカンファレンス	事例検討会における事例提供 (口頭発表) および質疑 (<u>室谷直子</u> 、岡崎慎治)
9. 『ワーキングメモリ概念に基づく補償的方略を用いた読み障害児の読解指導』	共著	2006年10月	日本LD学会第15回大会	ワーキングメモリを促進するとされるリハーサル方略を適用した読解指導を、2名の読み障害児に対し実施した結果、2名で単語読みレベルの改善、1名で読解レベルの改善がみられた。(室谷直子、岡崎慎治)
10. 『読みに困難を示す子どもに対するPREP (PASS Reading Enhancement Program) による仮名読み指導』	共著	2007年9月	日本特殊教育学会第45回大会	母親が外国人という言語環境をあわせもつ読み障害児、および、知的障害を持つダウン症児の読みの困難さに対し、読み促進教材PREPを実施し、その効果をプレ・ポストテスト、実施場面における行動観察から検討した。 (姜真児、 <u>室谷直子</u> 、前川久男)
11. 『PREP (PASS Reading Enhancement Program) を用いた読み支援-指導の効果と支援教材としての展望-』	共著	2007年11月	日本LD学会第16回大会 (自主シンポジウムの企画および話題提供)	自主シンポジウムにおいて、標記の演題で企画および話題提供を行った。室谷の話題提供の題目は、『読み困難児へのPREPの実践とその効果』であった。企画の趣旨は、PREP教材の背景理論、大学での研究ベースの実践、特別支援学級における現場での実践例を検討し、教材としての実用性や今後の課題について議論を深めること。(室谷直子、岡崎慎治、前川久男、星井純子、中山健)

12. 『認知特性を考慮したASD児の小集団指導の検討 -DN-CASのプロフィールを中心として-』	共著	2008年11月	日本LD学会第17回大会	3名の小学校低学年の自閉症スペクトラム男児を対象とした小集団指導を行った。各対象児の認知特性を考慮した学習指導(算数、国語)および集団活動の支援を行い、その効果について、指導前後における認知特性と行動評定の変化、行動観察から検討を行った。(岡崎慎治、木幡賢二、齋藤大地、武村知保、 <u>室谷直子</u> 、鈴木美枝子)
13. 『読み障害児の読解力に関連する要因の検討 -ワーキングメモリと音韻処理に着目して-』	共著	2010年10月	日本LD学会第19回大会	読み障害児の読解力を規定する要因についての予備的検討を行うため、読み年齢を一致させた定型発達児と読み障害児に対し、読解と、複数の言語・認知的課題を実施した。その結果、定型発達児では音韻意識とWMが読解を説明する要因であることが示され、読み障害児では音韻処理に頼ら(れ)ず、非言語的な推論能力やワーキングメモリを活用して読解課題を解いていることが推察され、見かけ上読み能力が等しい定型児とは異なる言語・認知的処理が読解を支えていることが考えられた。 (<u>室谷直子</u> 、前川久男) *平成19年度学術振興会科学研究費補助金(若手研究(B)による)
14. 『書字困難児に対する漢字書字支援 -書字の改善に関わる要因の検討-』	共著	2011年9月	日本LD学会第20回大会	書字困難をもつ一事例に対し認知特性に基づく支援を行い、書字の改善に関し、指導手続き、継時的な正答率の変化、行動観察、誤答といった観点から分析を行い、対象児の書字改善に関わる要因を考察した。その結果、対象児の書字改善に関し、漢字を部分に分解するなどしてとらえることの弱さが、言語化により補われた可能性と、漢字の分解・再構成や空書といった異なるモダリティを含む方略の使用の支援により、漢字を記憶し想起することが効率よくおこなわれるようになった可能性が示唆された。 (<u>室谷直子</u> 、浦瀧直子)
15. 『注意欠陥／多動性障害幼児に対するcognitive enhancement (COGENT) programを用いたペア学習の効果に関する検討』	共著	2012年9月	日本特殊教育学会第50回大会	就学後の読み困難が予測される幼児2名に、COGENTによるペア学習を実施しその効果を検証した。(青木真純、増南太志、 <u>室谷直子</u> 、松沢晴美、高野知里、岡崎慎治、前川久男)
16. 小学1年生のかなの読み書き発達における認知的規定因	共著	2015年8月	日本教育心理学会第57回総会(新潟市)	文字と音の対応関係の一貫性が比較的高いひらがなの読み書き発達における認知的規定因が、一貫性の低いアルファベット圏の先行研究と似た結果になったことに、特殊音の影響が考察された。(井上知洋、 <u>室谷直子</u> 、大城貴子、今中博章、北村博幸、前川久男)

17. 『読みの流暢性と読み能力との関連性の検討-流暢性課題の高成績者と低成績者との比較から-』	共著	2016年9月	日本特殊教育学会第54回大会	小学校入学直後の単語読みの流暢性と1年後の読み書き能力との関連性を検討した結果、単語読みの流暢性の個人差は1年後も保持される傾向にあり、さらに漢字や文章の読み流暢性や読解力でも同じ個人差を示すことが示唆された。(室谷直子、井上知洋、細川美由紀、前川久男)
18. 『小学2年生における読み書き習得の影響因』	共著	2017年9月	日本特殊教育学会第55回大会	小学2年生の読み書き低成績児10名の、入学当初における音韻意識(PA)と形態素意識(MA)を後方視的に比較した結果、相対的にPAの困難さが大きい者、MAの困難さが大きい者、困難さがみられない者、の3群に分けられ、MAが独立して読み書きと関連することが示唆された。(室谷直子、井上知洋、細川美由紀、前川久男)
19. 『単語音読の流暢さの発達軌跡-就学後2年間の縦断調査から-』	共著	2018年9月	日本教育心理学会第60回総会(慶応義塾大学)	就学後2年間のひらがな単語及び非単語における音読の流暢さの発達軌跡を検討した。その結果、単語読みの発達的变化と個人差は非単語読みより大きく、個々の児童の読み方略の多様性が示唆された。また、流暢さの分布における個人の位置づけは発達に伴い概ね一貫しており、読み困難の兆候を早期に見いだせる可能性が示唆された。(井上知洋、室谷直子、細川美由紀、今中博章、大城貴子、佐藤克敏、北村博幸、前川久男)
20. 小学生の読み書き能力に関連する認知的要因(1)-読みの流暢性に関する検討-	共著	2018年9月	日本特殊教育学会第56回大会(大阪国際会議場)	小学4年生及び6年生の文章読みの流暢性に関連する認知的要因を重回帰分析で検討した結果、4年生では形態素意識及び語彙知識が説明変数として有意であった一方、6年生では語彙知識のみが有意であった。このことから、支援において発達段階により異なる認知的要因に着目する意義が議論された。(齋藤ゆみ、室谷直子、細川美由紀、井上知洋、前川久男)
21. 小学生の読み書き能力に関連する認知的要因(2)-漢字の読み書きに関する検討-	共著	2018年9月	日本特殊教育学会第56回大会(大阪国際会議場)	小学小学4年生及び6年生の漢字の読み書きに関連する認知的要因を重回帰分析で検討した結果、4年生では語彙知識の関与があるものの、両学年で漢字の読み書きとともに、形態素意識との関連がもっとも強いことが示された。このことから、小学校中学年までに語彙を豊かにするとともに形態素意識に関するスキルを高めることの意義が議論された。(室谷直子、齋藤ゆみ、細川美由紀、井上知洋、前川久男)

22. 読み書きの発達における形態素意識の役割（自主シンポジウム）	単著	2019年9月	日本特殊教育学会第57回大会（広島大学）	本自主シンポジウムは、読みのマルチシステムモデルの枠組みから子どもの読み書きの発達と困難さを捉え直す試みとして企画された。「就学後2年間の読み書きの発達過程に関する縦断研究」（井上知洋）、「読み書きの発達に置ける形態素意識の役割」（室谷直子）、「読み困難児のひらがな拗音表記読み書き指導事例」（今中博章）の各話題提供を受け、前川久男先生より、これらを理解する理論的枠組みと今後の研究と実践の展開について議論をいただいた。（井上知洋、室谷直子、今中博章、前川久男）
23. 小学生におけるローマ字読み習得に影響をおよぼす背景要因の検討	共著	2021年12月	日本LD学会第30回大会（神奈川）	小学3年生を対象に、ローマ字読みの習得と、ひらがな、漢字読み能力とその背景となる認知能力の関連性を検討した。その結果、ローマ字読みの初期段階にある児童のローマ字読みの習得には、形態素意識や漢字、語彙といった言語知識の習得度が関連することが示唆された。（細川美由紀、関美月、室谷直子、井上知洋）
24. 小学生のローマ字読み習得に影響をおよぼす予測因子に関する縦断的検討	共著	2022年6月	日本LD学会第31回大会（神奈川）	小学3年生を対象とし、ローマ字音読の正確性と音韻処理をはじめとする認知処理能力とひらがな読みとの関連性について調査を行った結果、ローマ字読みの習得には音韻処理や形態素意識に加え、ひらがな非単語の音読の速さも影響を及ぼすことが示唆された。（細川美由紀、室谷直子、井上知洋）
(演奏会・展覧会等) 1. なし				
(招待講演・基調講演) 1. なし				
(受賞(学術賞等)) 1. 障害科学学会研究奨励賞		2007年7月	障害科学学会より	受賞論文：『読み障害児の言語性ワーキングメモリ課題遂行上の特徴と音読の効果について』LD研究, Vol. 15, No. 1, P. 100-P. 109. (2006)
2. 第20回日本特殊教育学会研究奨励賞		2008年9月	日本特殊教育学会より	受賞論文：『Reading remediation for Japanese children with reading difficulties: PASS reading enhancement program (PREP)』 Japanese Journal of Special Education, Vol. 45, No. 6, P. 405-P. 420. (2008)

研 究 活 動 項 目						
助成を受けた研究等の名称	代表, 分担等の別	種 類	採択年度	交付・受入元	交付・受入額	概 要
(科学研究費採択) 1. 学習障害児の読み困難とワーキングメモリとの関連性に関する研究	代表	若手研究 (B)	2006-2007年度	日本学術振興会	2,200,000	学習障害児の読み書き能力とワーキングメモリとの関連性について検討。(18730555)
2. 読み書き発達と形態素意識との関連性に関する基礎的検討	代表	挑戦的萌芽研究	2016-2019年度	日本学術振興会	1,800,000	小学生の日本語読み書き能力の発達の背景にある心理言語学的要因として形態素意識に焦点を当て、読み書き発達との関係や教育方法への応用可能性を明らかにした。(16K13605)
3. 認知処理プロセスを踏まえた小学生における英語読み習得に向けた支援方法の検討	分担	基盤研究 C	2018-2022年度	日本学術振興会	390,000	小学校の英語の教科化で求められる「読む・書く」学習への移行を支援するための教材の開発と、そのための基礎的研究。(18K02653)
(競争的研究助成費獲得(科研費除く)) 1. なし						
(共同研究・受託研究受入れ) 1. なし						
(奨学・指定寄付金受入れ) 1. なし						
(学内課題研究(共同研究)) 1. なし		—		—		
(学内課題研究(各個研究)) 1. なし	—	—		—		
(知的財産(特許・実用新案等)) 1. なし	—			—	—	